

岐阜県明智町の「日本大正村」の村おこしの運動から学ぼう

嶋田 勝次／神戸大学建築学科助教授▽

岐阜県明智町が今大変な人気である。日本大正村として五十八年二月に提唱され、五十九年五月に立村式が挙行されて正式に出発したものだが、山間の僻地がどうしても評判になっているのだろうか。

十月中旬の秋たけなわの一日、神戸からこの村へ日帰りの旅をした。中央線恵那駅から第三セクターの明智鉄道に乗り換えて数十分のんびりと終点の明智駅に着く。駅を出たとたん、ひとりのお年寄りが近付いて来て、「どこへ行

かれるのですか。観光でしたらご案内します」と親切な言葉でこの村との接触が始まった。ちっぽけなこの駅の一隅の日本大正村案内所のおひとりだった。

この明智町は元明智光秀城下であり、旗本遠山家の屋敷町でもあった。中馬街道と南北街道の交点であり、物資運搬の主要な位置を占めていたが、明治から大正にかけて、いくつもの製糸工場が出現して、活気ある街並を形成した。その面影が現代に伝えられているのである。

徒歩一時間半コースとか三時間コースが設定されている。明智駅から元郵便局・大正村資料館・遠山家下屋敷跡・元カフェ・大正の街並・お牧の方の墓・団子杉・白鷹城跡・天神神社・御陣屋跡・龍護寺・八王子神社・大正村役場など、中世から近代への村の歴史の断面をのぞかせてくれる。

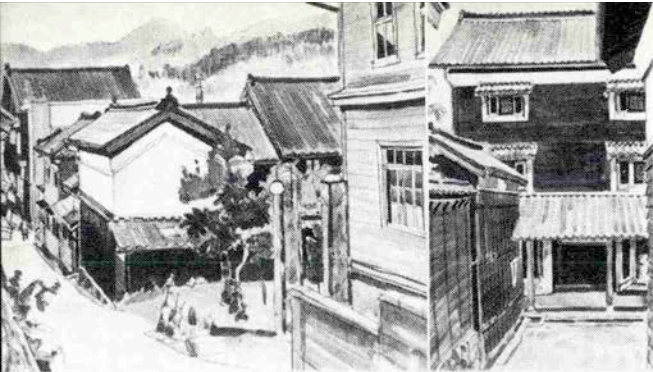
それにしても古き良き時代の大正のロマンが伝わって来るといふよりも、村全体に「大正村」を盛り立てる村おこし運動のふんいきが、村民全体にみなぎっていることがみごとである。

明智町の行政体制は、この民間主導のボランティア活動を裏から

バックアップして表に出ない態度である。牛乳屋さんの文化委員長、新聞屋さんの企画委員長などが中心になって、村民みんなで運動を展開されている。駅に下り立った時に声をかけられたのは、老人クラブからのボランティアさんであった。町会議員さんが資料館の切符のふりやられたり、婦人会でお茶の接待をされたり、ほのぼのとした人情が伝わって来る。

金沢の江戸村も、大山の明治村も、その時代の各地の建物を移築して、ものを見せる観光地となっているが、ここではふるさととの心に接してほしいということであった。この大正村の実行委員会の方が語られた。「昔は今ではない。しかし町をひとつにするものはここに住み、ここを大切にすれば一体感だと思います。」と力強く語られたのは印象的だった。

この十月二十五日全国にアピールして、日本大正村シンポジウム「小さな町の大きな役割——いまなぜ大正村か——」が大盛況で行なわれたし、十一月五日神戸都市問題研究所の宮崎賞が受賞される。当研究所の十周年を記念して昨年から行なわれている神戸市長宮崎辰雄理事長から与えられる地域経営活動賞である。地方のふるさと運動の努力にびつたりとした「大正村」に拍手を送ると共に、この村を訪ねた感動をかみしめながら、大都市のまちづくりもじっくりと見直すべきであろうと感じているのである。



日本大正村〈明智〉役場附近(左) 銀行蔵と郷土資料館(右) — 当地の絵葉書より

イメージの 中の神戸

文・鈴木 漢
写真・藤原 保之

□自動記述風に

いつの日も、予感にむかつてはばたい
ている。風見鶏。旗。汎神論。

灘の海の紺。海図の上を航行している
白い船舶。六分儀あるいは幾何学。坂道
と突堤に関する詩的考察。トア・ロード
合歓の並木一千一秒の中に、永遠が封じ
こめられる。

静止する矢、簾^{えびす}の梅。イナガキ・タル
ホ、津村信夫、竹中郁。かつて詩人が愛
してやまなかった、海峡の、あの大きな
夕日。

高鳴る管楽器のひとつし。開かれたま
まの扇。クレーンの脚。音楽。ハーバー
ライト。記憶の中の雑踏、花電車。聚楽
館。

関帝廟、六角堂。革命家が、自らのて

のひらに見出だす夢の結晶。菓子皿と珈
琲、木の椅子。六甲から雪のこぼれる日
若い杜氏^{とうじ}たちが点したのであるう暖かな電
灯。桶、酒蔵。琥珀色の、豊かな眠り。
手に星を掬^{すく}い、そしてまた星をちりば
めてみる。すなわち曼陀羅。摩耶、とい
う言葉のひびき。青空に近い牧場では、
羊が雲を喰^はんでいる？ 明るむ天井川。花
のトンネルを往来する。木の下陰、心の
不在を吹く松風。琴と笛。鐘楼。モスク
のてっぺんに掛^かっていた白い月。出窓に
舞う鳩。いつも輝^{きら}いている沖の方。

誰かのペンで、歴史は新しく書き足さ
れている。いつの日も、予感にむかつて
はばたいていた風見鶏。その羽根の風の
色。



イメージの 中の神戸

文・白羽 弥仁
写真・小山 保

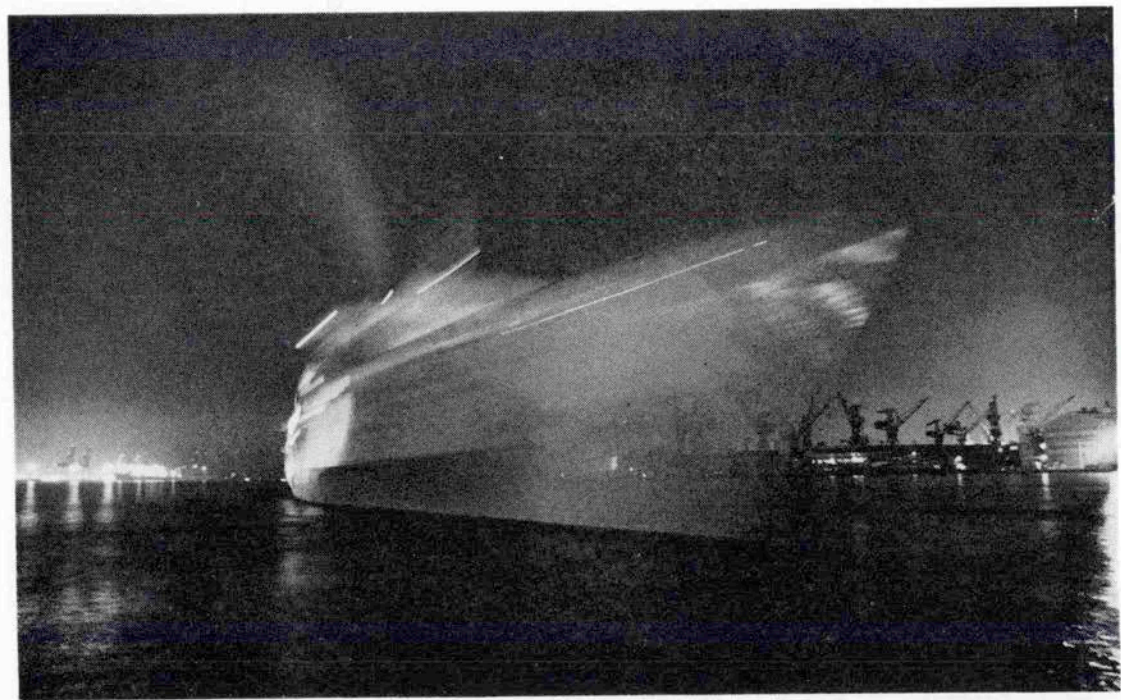
□なぜ、神戸で撮るんだ？

暫く神戸を撮る機会から遠ざかっていたので、イメージの中の神戸などということになると、逢うには遠すぎる恋人のようで、ひどく切ない。映画作りは、イメージの具現化の作業である。性懣りもなく映画を作りたいと思いついていられるのは、やはり神戸や芦屋、西宮の街並のデザインや空気を描くことにこだわっているからだと思う。

東京で、同業の人達と話していると「何故神戸で撮るんだ？東京でやれよ」とよく言われる。東京に住んで四年になり地理もだいぶのみ込めた。が、そこにイメージはない。まだ「情報」でしかないのである。仕事で東京を舞台に脚本を書くことがあるが、僕はほとんど場所指

定をしない。というか、できない。プロデューサーから「ここはどこらあたり？吉祥寺？成城？」と訊かれても、「まあ、ロケハンしてから決めましょ」と言ってしまう。神戸は、場所がイメージを喚起させる。設定ができると次は場所がスツと浮かぶ。例えば「ギャングのカーチェイス」という設定があると、これはもう絶対ポートアイランドのどこそこ、という具合に。

様々な思い出が、それぞれの場所と結びついている。もちろん、暗い思いもあるが強烈に記憶に残っていること（だから、時どき思い出すこと）は、甘く切ない映像として頭の中のスクリーンに映写される。そしてそれは決まって神戸が舞台なのだ。



イメージの 中の神戸

文・杉山 知子
写真・森井 禎紹

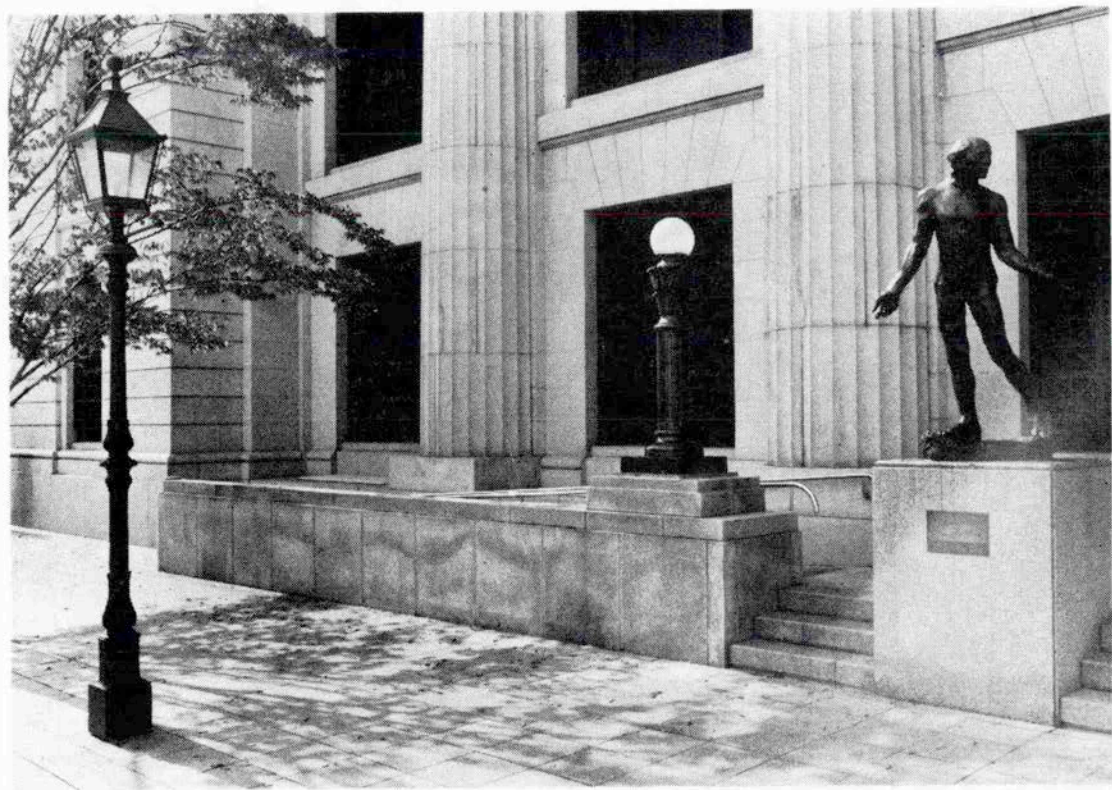
□アトリエの窓

フラワーロードの中ほどを、二本西に入った角の、古いビルの四階に、私のアトリエがあります。ほとんど毎日、あわただしく家を出ては、アトリエに向かいます。そうかといって、いつも物を創っているかと言うと、ちょっと首をかしげたりするので、何もしなくても、ここに居る方が、気持ちたちが落ち着くのです。晴れた日などは、窓を一杯に開けて、窓ぎわの椅子に腰掛けて（というよりは半分寝そべて）、ひねもすのたりのたり：と時を過ごします。毎日変わらない景色でも、その日のお天気や気温、風の臭いや私のコンディションによって、微妙に変化してくるのです。

向かい側に建つ、ココア色のビルの斜めには、京町通りをはさんで、オリエン

タルホテル、博物館が見えます。それらの建物を越えて、堅牢な古めかしいビルの屋上がのぞいています。こういうロケーションのバックには、時には船の汽笛や、夕方には、カラスの鳴き声なんかも聞こえたりして、不思議にマッチするのです。又、夏が近くなると、なま暖い海からの風が、神戸らしい潮の香りを運んできます。気持ちの良い匂いとはとても言えないのですが、神戸っ子の私は、神戸の良さを感じてしまうのです。

こういう神戸のエッセンスのきいたアトリエで、気ままに物を創ることに、私の作品の大切なキーポイントがあるようです。でも、あくまでも、神戸産、TOMOS' WORLDで、広く外の世界へ広げてゆきたいなと思っているのです。



イメー ジの 中 の 神 戸

文・元永 定正
写真・杉尾友士郎

□原風景の街

三十三年程前私は伊賀から神戸・魚崎にやって来た、知人は一人もいなかった。だから始めの印象は人より自然になったのだろう。

伊賀にも山はあるけれど神戸の山は山の中にもネオンサインが光ってる、それに感激驚いて私の初期の抽象画のヒントになった。それは摩耶山、六甲山、今でも神戸のイメージの一番はじめはこの山からだ。神戸に来て絵の勉強は加納町的美専堂、ほんの少しの間だったが友達が出来た。のみに行くのはジャンジャン市場、白いの一杯、天ぷらおくれ、あの雑踏がなつかしい。海を見るのは最初じゃないが、こんな港ははじめてで、ついでああったらよく見に行ったメリケン波止場は演歌の港、元町通りに新開地、伊賀

の上野にないところ、めずらしく面白くて、うろろうろとしたところ、コーヒのむのは西村コーヒそれはそこしか知らなんだ。きたないがきらくで安くて画かきが集まる蛸の壺のんでさわいで終電車、せまくてきたないのみやはシャネルもそうでカモカのオッチャン、おせいさん、ここでも時間は超越してる、それもなくなりセブンも消えた。

私は画かき神戸の画廊も大事なところローズガーデンのギャラリー、ド・ラ・ペは版画、新しい現代美術の画廊はうれしいけれど、なぜか壁面古くてきたないそれが特色？トリアロード画廊、シテイ・ギャラリーは若さの画廊、大の老舗は元町画廊、いつも変らぬ佐藤さん。

年うつり人変り神戸の印象ごちゃごちゃと私の心で踊ってる。



イメージの 中の神戸

文・堀江 珠喜
写真・森井 禎紹

□アンドロギユナスな街 KOBE

神戸はアンドロギユナス的な街である。こう書くと、「また世紀末かぶれのディレクタントがほざいている」と言われそうだ。アンドロギユナスは、後からその裸体を見て「ああいい女」と思い、前へまわると「ギャツ男／＼」ということになる摩訶不思議な存在である。

神戸もまたしかり。「港町」と思っているとすぐ後に山があるし、歴史があつてモダンな街ときている。寿司などの和食も美味だし、中華・フランス料理は本格的に楽しめる。どんな外国語が聞こえてきても、また金髪の坊やが「怒るでエー」と漫才師のような関西弁をしゃべっても違和感のない街。紳士がケーキを注文し淑女がハイボールをおおっても許される

街。ラブ・ホテルの横に学校もあれば、「神戸は県警とY組とが守ってくれる」と豪語する者もいる。

それがひとたびパーティともなれば、老若男女が共に浮かれ騒ぐ。例えば京都ならば、紹介者を三人くらいたててやっとお目通りがかなうような偉いお方でも、神戸では無礼講。そもそも夜景とは山から見下ろすものだと思っていたが、ここでは海から山を眺める——これぞ錯の美。

ところで「不倫」という言葉は神戸に似合わない。これはヤボな東急沿線金妻欲求不満地域の産物なのだから。神戸では、あくまで「大人の恋」とシャレてみたい。



イメージの 中の神戸

文・武田 信明
写真・藤原 保之

□絵葉書の塔

一枚の絵葉書がある。いつの時代のものかは分らないが、漠然として白黒の写真といい、葉書の古びた様式といい、大分昔のものであることは確からしい。葉書の一番下には△新開地界限▽と印刷され、かつての新開地が塔を遠景に写し出されている。何の変哲もない風景なのだが、私には妙に気にかかるのである。とりわけ、写真に小さく写っている塔のことを思い出す度、何とも落ち着かぬ気分を襲われるのである。

神戸に生まれ育った私は、小さい頃から市電に乗ることが好きであった。車輛の一番前に立って、運転手が不思議な形のレバーを操つるのを見ながら、電車の前面に迫ってくる街並を見るのが、うれ

しかったのである。中でも一番好きだったのは、上沢を過ぎて湊川公園のトンネルにさしかかる辺りで、右手に塔が見えてくる風景であった。子供心に、中学に上がったら、一人であそこへ登ろうと思っていたのを、今でも覚えてる。今に思えば、それはちょうど、荒れはてた廃屋を探検してみたい心持ちのようなものではなかっただろうか。しかし、その夢もついに夢で終わってしまった。塔は、いつの間にか取り壊されてしまった。

この絵葉書は、実は私の祖母にももらったものである。その祖母もこの春に逝ってしまった。祖母が、こんな絵葉書を何故大事にしまっていたのか。それもこれも、全てが二度と開けることのできぬ宝箱の中に封じ込められてしまった。



イメージの 中の神戸

文・伊勢田史郎
写真・小山 保

□緑いろの館

かなり急な坂道を女のひとが降りてくる。浅黒い肌に紫いろの薄い布を纏っている。擦れ違う時に目が遇った。何かに驚いたような大きく睜った黒い眸だ。過ぎ去った後に香料がすこし匂った。額の中心の小さな赤い円形の印が何時までも眼底にのこった。

私が勤めていた経済新聞の社長の家がある。その坂の上にあった。二階建ての異人館で淡い緑いろをしていた。カナッペをつまみ強い酒を飲みながら四人で卓を囲んだ。窓の下には宝石箱をぶちまけたような煌らかな灯の海があった。白い牌を掻き雑ぜるのに倦んで目をあげた。ぼつんぼつん……と灯が消えてゆく。闇が眼下に少しづつ拡がってゆくのだ。

教会の尖塔だけが、その闇のなかに白

く浮んでいた。学齢に満たぬ頃、母はよく私の手をひいて教会に通っていた。背の高いポプラの並木が整列していたが、舗装されていない道には時折つむじ風が白く舞ったりした。クリスマスチャンが殖えはじめた戦後になって、母は仏教徒に転じた。彼女は私に何かを語りかけていたのに違いないのだが……。

ざわわわわざわわわ……。浜辺に打ち寄せる波の音がずうっと耳の底にあった。一晩中。高台の家で睡っているといるのに。

塩湯という大衆浴場が海ぎわにあった。幼児の私は女湯の窓のむこうに烏賊つり舟のともす火をいく度となく母と見たが、そんな記憶とともに海からの声は私の内らでふと甦る。高台のその館がなくなってもう三十年余になる。



イメージの 中の神戸

文・蒼 竜一
写真・杉尾友士郎

□ガラス細工の街

少女は歌うだろう。わたしは永い永い間、夕暮れの中にいた。見あげると、爽やかな夕空は、果てしなく広がっていてその下を、勤めをおえた人達が、屈託なく言葉を投げかけ頷きあいながら、街角の建物から現れては何処かへ消えていった。

空気が澄んでいて、それはひたひたとわたしを満たし、しみじみとした安らぎが、ひらけた蒼穹に流れて行く。私は孤独であることの自由さの中で、思いつきの幸せをつかんでみたい。そう叫ばずにはおれない、哀しいほどの思いが身内からこみあげてきた時、感じられないほどの爽やかさで、風が通り抜けて行った。ああ、わたしたちの恋みたいなの、風のように、さわやかに、過ぎて往った愛。

その翳り。わたしは、風を追いかけてみたいナと、瞬間、思ったのだった。

そのような思い出の中の街を、この港町がそっと隠しているとしたら、それはこの都市の懐の深さと優しさのせいであろう。あれは、もうずいぶん昔のことに見える。山膚を上りきり、眼下に見たモザイク模様のガラス細工のような街であった。国道が一本港に通じ、その街は山懐に抱かれて、透明な空気のなかに沈んでいた。あれは何という町であったろう。赤いレンガを敷いた石段が、はしご段のように町中へ真すぐに下りて行った。その時、わたしはこの町を、リオ・デ・ジャネイロにとても似ているナと、思ったのだ。



イメージの 中の神戸

文・石阪 春生
写真・緒方しげを

□感覚神戸

神戸を語るということは、長年神戸に住んでいる私にとっては面はゆい。ましてイメージという言葉は絵かきにとって困った単語である。かりに私がもし神戸に住んでいなければ、他の土地から生れた神戸を郷愁的にもイメージしやすいことはたしかである。最近よく「神戸らしい」とか「神戸的」とか、謂ゆるイメージ用語にしばし出会う。

たとえば自分のことをいうのもおかしいが、あなたの絵は神戸らしい絵ですね。と、ふといわれる。そのたび私は返事にとまどっている。ただこれは裏がえしに考えてみれば人々が神戸にそうしたイメージ的風土を感じていることだとは思ふ。神戸はこうした意味で海、港、船、外来ハイカル文化と使い古されてきた言

葉たち。私もそれらにまみれ洗^{セン}礼^{レイ}をうけて育ちながら、自身の絵の中の風土を身につけたかもしれない。これは私にとっても不思議な時間であり、それから逃れられないことも感じている。またそれにあまんじているともいえるのである。たしかに日本列島の中でいま神戸は一つの確かな雰囲気的風土をもっている。これは神戸が誇りにしていることだと思ふ。つまり外来文化、欧州文化の影響が完全に育ってしまった、神戸文化なのだと思う。ここ百年、先人たちによってつくられたこの広がりこそ、次の感覚神戸になっ^ていかねばならないと思っている。神戸のイメージは感じるものでなく、私達が先人達を受けついで、どんどん新しく形造^つっていかねばならない直感と選択の時間がやってきていると思う。



イメージの 中の神戸

文・多田智満子
写真・緒方しげを

□わが町坂の町

長年六甲山のふもとに住んでいるので、自分の町はまず坂の町という思いがある。どこへ行くにも、家を一步出れば爪先を下げてのけぞるように坂を降りて行く。帰りはむしろその逆で、爪先上に坂道を登る。住きは手ぶらでも帰りは荷物をさげていることが多いから、つい車に頼りたくなる。若いころ、中古のボロ車で、冬の朝などエンジンがかからないときには、坂を自然にころがしながらエンジンをかけたりした。

山麓の住居はしかしことのほか気に入っている。第一景色がよい。北を見れば山、南は海。もっともここ数年、南側に家が建てこんで、居間や書斎から港を眺めることができなくなったが、それでも

二階からは何とか海が見える。港まつりの花火も二階のテラスから見物できる。

神戸は大会だけでも東京や大阪のようにだっ広くないのがいい。私は東京で育ったが、東京は一つの町というより複合都市で、あまり大きすぎて出歩くと疲れてしまう。大阪も不案内なせいかなり歩きまわる気にならない。神戸ぐらしいのスケールの都市がちょうどよい。

これでもヨーロッパの名高い地方都市と比べれば人口が多すぎるくらいで、これが住みやすい町の最大限の大きさだと思う。坂を降りて、ちょっと乗物に乗って都心へ行き、用を足して楽しんで、また坂を登って家に帰る。疲れることなしに都心へ往復できることが、わが町“という親しさのもてる必要条件である。



経済ポケット ジャーナル



★次年度神戸経済同友会の代表幹事に後藤俊彦氏

神戸経済同友会の62年度の代表幹事に阪神相互銀行の後藤俊彦社長が内定した。後藤氏は昭和25年東京大



後藤俊彦氏
学卒業
後、神戸銀行
入行、

太陽神戸銀行から57年阪神相互銀行社長に就任。

現在代表幹事の竹田剛男、関西貿易社長の後任として来年4月から、中井善夫代表幹事(川崎重工常務)とコンビを組むことになる。

金融関係では太陽神戸銀行以外での代表幹事は初めて。神戸経済界での顔の広さと、ソフトな人柄での活躍が期待される。

★神戸で、水環境問題会議開催される

「第十一回琵琶湖・淀川環境会議(主催琵琶湖・淀川環境会議、代表・世話人

稲葉滋賀県知事)が10月30日、神戸国際会議場において開催された。

琵琶湖・淀川流域における明日の水環境をみつめて、人と水との望ましい共生について、をテーマに意見の交換がなされた。宮崎神戸市長、稲葉滋賀県知事、片山京都府副知事らが出席し、水資源開発の促進・水

質保全対策の推進・水環境の形成に貢献された。水環境の形成に貢献された。水環境の形成に貢献された。



真剣に議論された水環境の形成に貢献された。水環境の形成に貢献された。

神戸も水道の水源の70%が淀川に依存しており、これからもっと注目を浴びる問題となるだろう。

★「ダイエーさんのみや」オープン

さる10月25日、三宮のダ

イエー7店舗が全面改装し、名称も「ダイエーさんのみや」と統一、グレードアップを図った。

オープン初日には、男館・女館の間にある道路上でオープニングの式典が行われ、中内潤専務のテープカットを行う。



テープカットを行う中内潤専務

中内潤専務のテープカットの後、仕掛け花火の点火等、華々しく開店した。

開店と同時に、オープニングを狙った買物客がぞくぞくとおしかけた。

今回の改装の目玉の一つに、「ゼント・ハウス・クラブ」があり、秘書を持たない中間管理職の秘書代行を総合的に行う等、単なる

販売店ではない、深まりを持った店舗になっている。★企業と消費者の接点

「企業広報研究会」発足神戸の企業39社による、「企業広報研究会」が設立、活動を開始した。

高度情報化社会に伴い、企業と消費者、地域社会をつなぐ接点としての企業広報の重要性を認識し、対応するもの。

10月27日、神戸商工会議所で設立総会が開かれ、

8月を除く毎月一回の例会を開き、広報担当者同志の交流・研さんを図る、という方針も決定。なお、幹事社は、上島珈琲・川崎製鉄・神戸電気鉄道・ダイエー・田崎真珠・ファミリアの6社。企業にとっても消費者にとっても良い結果を望みたい。

★KOBEOフィスレディ★ 玉田三子さん(20)



経畿美術短大インテリアデザイン科を卒業、現在クリナップの神戸ショールームに一人で勤務。接客・キッチンレイアウトと精を出す。「一人で淋しいけど、2階の営業所の人やお客様が話し相手」と、けなげに頑張っている。映画ファンだが、涙を誘う作品は泣くので観ない。異性に対しては、不幸なことに仲々夢中になれないそう。「自らが甘えるタイプじゃないので、包容力のある男性が…」同世代の男子諸君には「しっかり」と激励。さっぱりとしたB型、水瓶座。

〈クリナップ神戸ショールーム〉

●話題の人・話題の店

感性豊かにスギヤ(宝塚)デビュー

歌劇の街・宝塚。道行く人もオシャレな人が多く、華やかな雰囲気。神戸沿線とはまた違う味わいをもつ宝塚で、神戸を中心にアダルトなハイファッションを展開しているスギヤが装いも新たにオープンした。

スギヤ各店はいずれも阪急沿線の駅ターミナル内か、その近くにチェーン店をもっており、足の便の良さがセールスポイント。宝塚店も阪急宝塚南口を降りれば目の前にディスプレイが表われるとい

う便利さ。忙しいOLたちにも好評というの納得できる。加えてお店の方の対応の細やかさも評判だ。

「ファッションに関する知識が雑誌・テレビ等の影響で氾濫している今、お客様以上の感覚を常に磨いておかねばなりません。こちらに来られる方は大阪や神戸でも商品を見て、目が肥えていらっしゃるので大変です。そしてそれ以上に大切なのは、人と人とのコミュニケーションですね。」現

在漆原次長以下4名の女性が笑顔もソフトにアドバイザーとして、それぞれの個性を生かしながら頑張っている。

「会社の帰りにでも顔を見せてもらえるような——宝塚の街のカラーを大事に店づくりが考えられています。」と漆原さんと中野店長。

毎日のコーディネートに欠かさないセーター、ブラウス、スカートなどの単品から少しあらたまった



今年のパーティーに

たワンピース。そしてドレスに合わせられるアクセサリーまで様々な商品が取り揃えられている。

全体的にキャリア志向が強く、他のスギヤ各店に比べると若やいだ趣きがいかに宝塚らしい。

「やはり歌劇を見に来られる方たちに代表されるように感性も豊かで若いセンスを身につけていらっしゃる方が多いそうですね。皆さんハイクラスのおしゃれを楽しんでいます。今後もあらゆるニーズに応えていけるようにしたい。」と語る。スギヤ宝塚店は華やかな宝塚カラーに彩られた店だ。

■スギヤ宝塚店 阪急宝塚南口駅構内 ファミリーストアー内 10AM~7PM 木曜定休 電話 0797-731244



上・見やすく、買いやすく改装された店内 下・中野店長を囲んで